

フランツ・アルトハイム著

『古代世界の衰退』について

内田芳明

まえがき

この論文は、既に發表した二つの拙論『古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格』一橋論叢三三の一（一九五五年一月號）及び『地中海世界史とヨーロッパ生成の問題』社會經濟史學二一の一（一九五五年八月）との關聯で書かれたものであり、参照されたいと思う。前者の論文では主としてウェーバーとロストフツエフが、後者にはコルネマンが取扱われている。「比較」はこの場合、古代文化没落史考察の觀點からそれぞれの個性を相互に明瞭ならしめんとする意圖に發したものであって、特にこの四人が選ばれねばならぬという必然性も約束もある譯ではない。従つてその意味では、——あらゆる研究についてもある程度言えるようにこの場合にも——偶然性を脱するものではない。しかしながらこれら四人については、いずれも

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

それぞれの仕方にて古代文化の総合的な把握と古代世界の普遍史に到達している数少い指導的な、そして最も卓絶した歴史家であり、又その所説の内容・方法・歴史觀についても相互に鋭く對照的でもあるだけに、却つて比較の積極的可能性を幾多含んでいるのであって、このことを敢て否むべき理由は存しない。加えて、二つの世界大戦を経験した二十世紀前半の西歐の精神狀況が歴史學に就中古代世界像に如何に反映し得るかを觀察するためには、この四人はいずれも看過し難い存在であることは吾々の研究が幾分明瞭にし得たと信ずる。

第二次世界大戦後の西歐の古代史學界が戦中戦後の生活蓄積の底力を示して陸續と公表し來つた研究成果は、

頗る龐大且つ多方面に及んでいるが、中でもその大規模な取扱ひ方と挑戦的とも言ふべき主張とによって特色ある著作を數多く世に問うて來たのは、現ベルリン大學教授フランツ・アルトハイム (Franz Altheim) である。⁽¹⁾ 氏については既に二、三我が國にも紹介せられてゐるが、この論文に於ては、彼の主著の一つである『古代世界の衰退』⁽²⁾ (上下二卷九百頁一九五二年刊) についてその内容・構造・方法・史觀に互つて考察してみたいと思ふ。⁽³⁾

本書は、全體として言えば、紀元後第三世紀に於けるユーラシア大陸の世界史であつて、時代的には古代末期史の一時期を考察の對象としているが、そのうち第一卷はローマ帝國外の地域と諸民族 (Iran, China, Gotten, Araber, Dromedarnomaden, Ugrofinnen, Tibet, Japan) を取扱ひ、第二卷ではローマ帝國それ自身を取扱つてゐる。全體の構成からみると、紀元後三世紀に草原地帯 (Steppe) に生起して、これらの全地域に漸次波及せざるを得なかつた軍事的變革が主要契機となつて正に「世界史」を成立せしめてゐるという點で、全地域・諸民族は一應平等の比重で見られてゐる如くにもみられる

が、實は然らず。むしろ第一卷は第二卷の序曲とも見なさればならぬ。量質共に充實した第二卷では更に二つの部分に分れていて、第一部『帝國と帝國の危機』、第二部『神々と皇帝』となつてゐるが、この二つはほぼ同等の頁數をもつてゐる。このうち、アルトハイムの歴史方法論と關聯して特に注意を喚起して置くならば、この第一部は政治史・軍事史であるに對して第二部は十分なる意味で一つの宗教史である。その宗教史の取扱ひ方が政治史との結合に於て行われてゐる點が注目せられる。

アルトハイムの主張に従えば、現代歴史學とは『過去に即する現代意識の生成』であり、又逆に過去の世界についての歴史敘述は『この現代の出來事によつて縛られるを得ない』ものである。第二卷第一部の結章「史的推論」に於ては、古代史と現代史 (二回の大戦) との直接的比論を主として軍事的觀點から展開することによつて、特にこのような歴史家の歴史意識の本質的性格として考えられてゐる古代と現代との内的交流なるものが如何なるものであるかが解説されてゐる。アルトハイムにとって「現代」は安寧と秩序の時代ではなく、大變革と

危機の時代なのである。だから現代の問題状況から古代世界の危機の問題意識が與えられると共に、古代の危機の分析と理解は逆に現代世界への「診断と豫診」を提供するものである。しかもその危機の性格は、對外政治的、就中軍事的のものとして認識せられた。かくしてローマ帝國の危機とその衰退は、その原因を専らこの外的事象に求められねばならぬとせられた。彼の主要主張たる「對外關係の優位」(Primat der Außenpolitik)なる概念がここに登場して来る。と同時にアルトハイムがロストフツエフに對して鋭く對決を迫るのもこの點である。アルトハイムはロストフツエフが美しい敘述に齎したローマ帝國社會經濟生活の諸相とその實體的内容とについて批判するのでも拒否するのでもない。その點ではむしろ Mickwitz, Oertel, Milne, Heichelheim などの卓絶した經濟史家たちと並べてロストフツエフの把握した内容を前提している。所がローマ帝國の衰退の「原因」を問うとき、兩者の對立は調停し難いものとなってくるのである。即ちロストフツエフによれば、農民からなる軍隊と都市ブルジョアジー(Bourgeoisie)との社會的的

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

目こそは、第三世紀の内亂と革命の眞の意味主たる推進力であった(Rostovtzeff: Roman Empire, p. 444)。そればかりでなく、この内亂こそは外敵蠻族の侵入を誘發しそれを可能ならしめたのであった(Ibid., p. 440)。だから三世紀の危機は政治的まして軍事的性質のものでなく、専ら對内的社會的性質のものであった(Ibid., p. 447)。之れに對してアルトハイムは、かかる専ら經濟生活の内部に孕まれた社會的階級對立の如きは、コムモドゥスの死からディオクレティアヌスの登極に至る(A. D. 193—284)巨大な大變革を招來せしめた原因ではないという。むしろユーラシア大陸大の世界史的規模に於ける軍事的變革に由來するという。加うるに又内部的方面についてはその革命内亂なるものも、アルトハイムに於ては、ロストフツエフの解釋するように社會的的反目や階級的對立を意味するものではなくして、後に吾々が多少明かならしめるように、帝國國境内外に居住する諸々の民族性(Volkstum)相互の間の對立抗争という性質のものとして解釋せられるに至った。民族性こそはアルトハイムのローマ帝政史に於て、その文化の衰退と創造と

をそれぞれ擔うところの、歴史を推進する主體であり、帝政史發展の内面史をも彩る歴史の主役にまで高められたのであった。言わば、先ず外部からの衝撃に對して、内部からの反應が、この民族性に於て呼應する。そこで吾々は、《Primat der Außenpolitik》: 《Volkstum》なる主要二概念を手引にこの大著を縦横に分析しつつ、必ずしも敘述の順序に従わず新たに再構成を試みることによって、これを一段と深く追究してゆきながら、アルトハイムの思想的背骨を形造る歴史觀の問題にまで肉迫して行こうと思う。

アルトハイムはローマ帝政史上に於て、その第三世紀中葉に古代・中世の決定的轉換をみる。この轉換がこの時代に於て生じたことを解明することが本書の意圖であるとさえ明言している。しかも第三世紀に於けるこの轉換なるものは、少くとも西方にとっては、單に軍事的・政治的の災禍であつたばかりでなく、文化的災禍をも意味した。要するに全文化的大規模なる危機と崩壞の時代であると考えられているのである。ところでこの危機と崩壞を生起せしめた原因が、對外關係の局面に於てロ

ーマが遭遇した新しい外部的事象なのであった。それは二つの側面をもつものである。その一つは、ローマの共和制時代以來の對外政策、即ち擴張政策である。この擴張政策によつてローマは、從來ローマ（或は地中海世界）と外部の大陸内諸民族との間の言わば緩衝地帯をなしていた隣接國家や民族を滅亡させたが、そのことによつてローマは、こんどは直接に、より強力にして若い野蠻な諸民族と對峙せねばならなくなった。ところで第二の側面は、中央アジアの草原地方に發して、東は漢の帝國から日本にまで及び、西はイラン、南ロシア、ドナウ河北邊、更にアフリカ北邊にまで及んだところの、遊牧民的騎馬民族に發する新しい軍事技術の登場であつた。今やこれらの軍事的により優越せる若い騎馬民族が、直接ローマを要撃したのであつた。彼らの輕裝乃至重裝騎兵 (Bogenschützer, cataphractarii, clibanaria) が、屢屢ローマの歩兵隊を大敗せしめた。アルトハイムは第一卷に於て、この軍事的兵制大變革の波がいかに諸地域に及んでその舊い文化帝國を没落せしめるかを論證した後、第二卷のローマ帝國の敘述に於て、この「世界的

騎馬様式」が遂にローマ世界にも浸透して、之れを崩壊せしめざるを得なかつた次第を論ずる。その歸結が古代世界の没落・中世世界（＝Rittertum, Feudalismus, Grundherrschaften）の開始であるといふ。ところがここで注意すべきは、アルトハイムの没落史論からうける印象は、かのロストフツエフにみられたような、古代世界の衰退の押しとどめ難い運命的過程に對する共感ではなく、従つて又單なる衰退原因論に止まる性質のものでは斷じてなく、むしろ全く新しい創造と革新への旺盛な精神的傾向である。そのことは、彼の「對外關係の優位」並びに「民族性」の二概念のもつ思想的性格を明確にしてゆくことによつて、一層深く彼の歴史觀と關聯するものなることを吾々は明かにするであろう。

吾々は先ず、「對外關係」の側面から、ローマが遭遇した新事態によつてローマが如何に影響されてゆくか、という點から分析してみることにしようと思ふ。

既に指摘したように、この時代轉換の第一の點は政治的・軍事的の方面に屬する事柄である。それは國境防衛體制の、要するに軍事體制の變化である。ガリエーヌス

アマレット・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

(A. D. 253—268) の兵制改革がこの轉換の焦點に据えられる。そして敘述は歴史發展の流れがこの一つの頂點に向つていかに高まつてゆくに努力が集中されている。細かにそれを辿る暇がないし又その必要もないが、例えばセプティミウス・セウエールス (A. D. 193—211) は、自らスコットランド戦線に赴いて北部可動民族の前に大敗し戦死した。對東方戦線では帝國最強の名聲あつたイリヤリア (Illyria) の農民からなるドナウ兵團をもつてしても、アレクサンデル・セウエールス (A. D. 222—235) はイランの騎兵隊の前にあえなく敗れ去つた。ガリエーヌスの父ウァレリアヌス (A. D. 253—260) は、同じく對ペルシア戦に於て大敗し、敵に捕えられた。これらの史實を示しつつ強調する傍らアルトハイムは、騎馬戦法が複雑な曲線を書きつゞ、ローマ軍の戦法と兵法とに影響を與えて行つた過程を（その點必ずしも錯綜した史實が明快に處理し得たとは言えぬにしても）懸念に追求し敘述する。即ちコムモドゥス (A. D. 180—193) 以來既に、これまで弓を使用しなかつたローマの戦法に急激な變化が齎され Bogenschützen は帝國の國境到る處

に現れるに至ったが、その戦法の黄金時代への第一歩はセプティミールズ・セウエールズである。所が *Bogen-schützen*, *Kataphrakten*, *Klibanarier* など、軽・重装騎兵の利用は、アレクサンデル・セウエールズを頂點として、東方では屬州が *Palmirer* 王國の獨立に歸屬するに至るや否や、突如消え失せた。しかも更に他方では、ローマ軍は、元來重装歩兵を傳統的裝備としていたこと、指揮者以外は馬を使用しなかったこと、*Klibanarier* の如き重装騎兵は、その外觀からして既にローマ人には異質的と感ぜられた程であり、ローマ的戦術の本質と矛盾するものであって、なかなか受容されなかったことなどが指摘せられているから、一層矛盾混亂に陥入っているように思われるのである。然しながら之れら一見謎の如き相反的史實の列擧も、吾々がさきに指摘したアルトハイムの基本的的方法概念たる「民族性」の根柢に於て一切が貫かれ處理せられて行っていることを知るに至るならば、直ちに了解せられるのである。アルトハイムは帝政史、殊に第三世紀のそれを、帝國內に包含せられている民族相互の覺醒、鬭争、交替、という觀點からみている

ということが出来る。従って、重装・軽装騎兵の戦法の上述の如き急激なる盛衰は、アルトハイムが「東方的皇帝達」(*östliche Kaiser*) と呼ぶところのセウエールズ王家の帝權支配の盛衰と一致した、というのはそのためである。東方(就中ベルシア)から導入されたこの重装騎兵様式は、東方的要素(IIパルミユラ王國)が帝國から離反したその瞬間に消滅したという。しかもそれは、西方では、マウル人(*Mauri*, *Moors*)の軽装騎兵と結合せるダルマティア人が皇帝の豫備軍として現れてくる時と一致しているという。

さて、主として東方、即ちベルシアや東部シリア(IIパルミユラ)との戦鬪によって影響され導入された重装騎兵の武裝及び戦法は、かくの如き一時的なはかない運命に終ったが、しかし騎兵制への影響一般がそれで終つて了った譯ではもとよりない。むしろ、その影響は必然だった。その理由の第一は、ローマ帝國國境戦線の多方向的脅威、ことに北ゲルマン諸族と東部ベルシア民族との二方面同時作戦の必要は、可動迅速な攻撃豫備軍を要求したことである。第二の理由は、この作戦上の必要と

いうよりはむしろ、騎士的・騎兵の様式それ自身であつて、これこそは、東ゲルマン諸族を始めとして支那やイランやアラビアを征服し、ローマをもその例外たることを許さなかつたところの、三世紀の普遍的な大變革であつて、遂に、ローマ帝國とその軍隊を全面的に覆うに至つた。かくして茲にガリエーヌスの兵制改革が登場してくる。これは従來の國境戰線を形成するレギオ中心の國境駐屯軍體制（＝統一的軍團）の解體を意味した。そして一方では、國境都市の要塞化による國境の純然たる固定防禦據點を建設すると共に、他方では、皇帝直屬の可動的な騎馬部隊（*vexillatio*）を中核とする戰鬪攻撃部隊を作り、前者は防禦に後者は攻撃に、戰術上それぞれ専門分化されるに至り、主力をウェクスィラーティオの建設に置いた。かくて、遊牧的な騎兵部隊の侵入に惱まされ續けて來たローマは、いまやそれに優に對抗しうる最も強力な帝國防禦體制をここに創造した。否それは已むを得ず創り出さざるを得なかつたのである。

ところでアルトハイムは、このガリエーヌスの兵制改革の直接の動機あるいはその意味は、それが軍事的な點

フランク・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

にあるのではなく、政治的、つまりローマ的な點にあるのだという。その意味は、屬州兵團相互の激しい反目や對立によつて、事實上存立する帝國の分裂状態を解消せしめ、ローマ帝國の統一を再建せんがために之れに必要な強力な戰鬪態勢を必要とした、という意味であらう。つまり外からの影響という必然性もあつたにしても、直接ガリエーヌスの指導理念は、「ローマ帝國統一」というローマ的、政治的 성격のもので、という意味であらう。ここにもアルトハイムの民族性概念がその解釋の根柢にある。その點は後にも觸れねばならないが、ここで注意すべきは、ウェクスィラーティオの構成メンバーについては屬州間の超部族性という原則が實施されていることである。それは、マウル人、ダルマティア人を主體とする輕裝騎兵から成つてはいたが、しかしその構成員については超部族的選抜の原則が實施せられ、且つ、それは出身地から遠隔な地に移されていたために、漸次超部族的融合の傾向が生まれて、ここに分裂せる帝權の理想的統一が新しく形成せられうる端緒を獲得したという點である。かくしてガリエーヌスによつて創設された兵制改

革なるものは、ユーラシア大陸に波及した軍事的技術と騎馬様式の壓力・影響が、ローマ帝國の軍事體制にとつてどんな抵抗乃至反響を捲き起したかを示すばかりでなく、ローマが如何にこの「對外關係」の相剋を通じて、却って自己本然の理念を呼び醒しつつかに政治的再建をなしとげるかをも示すであろう。だから、正にアルトハイムの没落論の基調には、このような未來創造につながる建設的な明るい調べが奏していることになるのである。

さて第二に、三世紀の轉換は精神文化の方面についても妥當する。これが第二卷第二部の問題なのである。ここではアウレリアヌス (A. D. 270—275) の活動がガリエーヌスの地位に對應する。アウレリアヌスによるエメサの太陽宗教の導入という重大な歴史的事件を解釋せんがために、アルトハイムは、一方に於て、オリエント殊にシリアに高揚せるそして西方に對して優越せる精神文化の動きを顧み、他方では、ローマの（之れに對する）精神的反作用を元老院教養階級について顧み、この兩者の綜合としてアウレリアヌスによる太陽宗教の受容の

歴史的意義を理解せんとした。オリエントに於ける精神的運動は、ヘレニズム末期からローマ帝政初期にかけて一つの精神的高潮に達するが、次いで紀元後三世紀に於ていま一つの頂點を形造る。これらオリエントの古代末期史に貫流する動きを今一言のもとに要約して行えば、それは、ギリシア・ローマの諸宗教をも含みつつ主としてオリエント世界に本來の根をもつ諸宗教混合 (Syncretismus) の中から、今や世界宗教が成立し世界傳道が擡頭したということである。これは、三世紀についてみれば、言うまでもなくマニ教であり、ローマ史との關聯で特に重要なのはエメサの太陽宗教の理論的形成である。しかもこの精神的形成はオリエントに於ける政治的擡頭、具體的に言えば軍事的觀點から前述した所のパルミエラの Odaenathus 王權の獨立形成と時を同じうするものである。これらオリエントの精神的・政治的な革新的動向は、それに對する西洋側の精神的反作用となつて現れ、思想、文學、哲學の方面に於て最も高い精神的結實を生んだ。ガリエーヌスの反キリスト教的教養や彼の古典主義的傾向に歩調を合せて彼を取巻いた教養社會

層の動きや、殊にプロテイナーノスのギリシア主義がそれである。しかも人は、その本質に於てオリエント的ではなく深くギリシア的であるプロテイナーノスの思想的後継者たちの動きや性格の中に、いかにオリエント的要素との密接な結合があったかを想起すべきであらう。プロテイナーノスに従う新プラトン主義の人々には、ポルピュリオス、ロンギノス、カリニコス、ヤンブリコス、などがみられるが、プロテイナーノスの直弟子にして彼の傳記をもつたポルピュリオスその人が既に、オリエント的諸宗教混合を示している。彼こそは新プラトン哲學の體系の中に太陽宗教を導入した人である。これらの後継者たちは又すべてシリア人あるいはシリア出身の人人である。かくして之れらの精神的運動の最後にアウレリアヌスの太陽宗教の受容が位置づけられる。オリエントの古代末期の諸宗教混合の中で、つまり古代世界の神々の群像の中で、既にそれ自體一つの最も巨大な革新を意味するところの、このエメサの唯一神教 (Monothéisme) の臺頭は、いまやアウレリアヌスによって西方の (ローマの) 國教となった。オリエントの精神の

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

根幹はローマ精神の中核にまでなつた。アラビア民族乃至アラビア半島は、帝國の政治的支配權の中核にまで深く關與した (皇帝 Elagabal, Philipus Arab などを想起せよ) ばかりでなく、今やかくのごとくローマ的精神の中核にまで侵入し來ることによって、またもや世界的意義を獲得した。

さてここでも吾々は、民族性の概念がアルトハイムの歴史把握に特別な役割を演じていることに注意を喚起せねばならぬと思う。それはアウレリアヌスの太陽宗教の受容という歴史的事件の意味をローマ文化 (Römertum) の復興という意味に解釋して、且つこの復興即新創造 (＝轉換) を意味した運動の主體を、アウレリアヌスが所屬したイリュリア人なる民族性に求めこれの意義を強調するからである。かくて吾々は以下に於て民族性の概念をアルトハイムが、第三世紀に生じた以上二方面の轉換、つまり軍事的政治的方面と精神的宗教的方面との轉換の動きと、いかに内的に關聯づけるかをみねばならぬ。

所謂武將皇帝時代の内亂の一世紀、具體的に言えばコ

ムモドゥスの死からディオクレティアヌスの登極に至る時代は、絶え間なく軍事的性格の増大した一世紀であり、今やこの巨大な軍事的統一體がローマ文化の代表にまで成り上った。しかしその内部狀況をみるならば、その統一の實體なるものは、實は、帝國內に包攝せられた諸々の民族性を代表する軍隊と軍隊との間の、又その軍隊が擁立した皇帝たちの間の、従って要するに屬州の Volkstum 相互の反目と抗争であつた。コムモドゥスの登極に當つては、Pretorianer (都市ローマの)と屬州軍との對立が尖鋭化し、その結果は後者の絶對的優越を示すに終つたが、セプティミウス・セウエールスの登極に於ては、既に Pretorianer の勢力は失墜し、今やローマ帝國を代表する三軍團、即ちケルト・ゲルマン的ライン兵團、イリュリスを中心とするドナウ兵團、東方屬州のシリア・バビロニア兵團、の間に於ける對立緊張が顕在化したのである。武將皇帝時代の内亂史たる第三世紀は、少くともアルトハイムの把握に従えば、對内的にはこの Spannung に於て始まつた。しかもイリュリア農民を主體とするドナウ兵團の壓倒的勝利をもって

始められたと言ふことが出来る。即ちアフリカ出身のセウエールスは、イリュリス兵團によつて、帝位をめぐる内亂にうち勝つを得たのである。そしてコムモドゥスからディオクレティアヌスまでの帝政史は、——アルトハイムの基本的構成に従えば——その軍事的政治的方面についてみても精神的文化的方面についてみても、主役はイリュリア對シリアの抗争であつて、ゲルマン的ケルト的要素は一應脇役の地位に退いていふことが出来ると思ふ。すなわち、先ず戰術的にみれば、イリュリア出身農民歩兵軍に對立するシリア的東方の弓を射る騎兵軍 (Bogensützen) の對立、従つて同時に彼らの擁立する皇帝たちの對立であると見ることが出来る。このことを最も典型的に示す例は、トラキア出身のマクシミアヌス・トラックス (A. D. 235—238) をめぐる内亂である。この内亂の解釋に於てもアルトハイムは、民族性相互の相剋という觀點から獨創的解答を與えているのである。マクシミアヌスに對して元老院は、アフリカに、都市の富裕な上層市民の支持をうけて起つた叛亂の首領ゴルディアヌス一世、二世と結んで對立したが、更に、

バルビーンヌス、プビアーンヌスの二人を元老院選定皇帝として押し立て、この不法暴君皇帝マックスミーヌスと争ったのである。が、この抗争の意味は単にイタリアの元老院教養階級と野蠻にして残忍なマックスミーヌスの支配との対立というような平盤的なものではなかった。むしろ次のことを意味した。セウエールス王家支配下にあったこの時代に、突如トラキア出身の農民兵團の首領マックスミーヌスが侵入し來って支配權を掌握せんとしたのであるから、これに對して、既にセウエールス王家支配下にイタリアに於て優勢な勢力を占めるに至っていたオリエントの要素(オリエント出身のセナートル)が、この内亂に際してイタリア人(Italia)と精神的軍事的に結合して對決したのである。つまりマックスミーヌス皇帝はその登極の最初からしてオリエント的なものの激烈な抵抗に遭ったわけである。これがこの内亂の眞の意味であるとアルトハイムは主張する。

さて、ウァレリアーンヌスの登極はケルト的・ゲルマン的軍隊にその支持を見出した。彼はこの軍隊の力によって、ドナウ兵團が支持するアエリミアーンヌスを打破っ

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

た。第三の兵團であったゲルマン的ライン軍は、ここに始めて主役をもって抗争の舞臺に現れた。ところがこのライン兵團は、ウァレリアーンヌスの子ガリエーンヌスの登極に當って支持することを拒んだ。しかも他面ガリエーンヌスは、ドナウ兵團の擁立する反皇帝インゲヌウス、レガリアーンヌスと對戦せねばならなかった。かくしてこの難局を打開するためにガリエーンヌスは、かの兵制改革の斷行という政治的な手を打たざるを得ぬに追い込まれたのである。つまりこの改革は軍事的對立に尖鋭的形をとって表現された帝國內屬州諸「民族」相互の間の相剋を一つの統一に齎すということに動因づけられていた譯である。

そこで重大な問題が生ずる。今まで論じ來った如く、三世紀のローマ帝國史を一瞥すると、外來民族的要素の氾濫という印象は避け難い。その戦闘手段についてみれば裝備や戰術は外來のものが益々優勢になつてゆく。帝國內を縦横に馳け廻つて國境防衛にとめた戦闘主體は屬州内外の非ローマ的諸民族からなる兵團である。へで

であろうか？。アルトハイムのこれに對する解答はこうである。既に吾々が注意したように、ウエクスィラーティオの創設といつても、これは單なる外來戰術の模倣ではない。その戰術的意義に於て優に侵入諸蠻族に對抗し得るのみか、彼らの一大脅威となつた體制であつた。

この國防國家體制の新導入によつて、その後ローマ帝國の再建は事實上可能とされて行つたばかりでなく、かつてない四世紀の平和を築きあげることが出来たのであつた。しかも内的にみれば、吾々が指摘したように、ガリエーヌスの改革は、國內の分裂抗争を一つに再統一する政治理念に貫かれていた。對外關係の局面で發生する民族對立(戰爭)は、ローマ文化の眞に國民的創造への醗酵素として作用している譯である。この點ではアウレリアーヌスの活動に於ても顯著である。ローマ文化の復興即新創造という事態の中にアウレリアーヌスの太陽宗教受容、その國教化の眞の意味は存する。同時に正にこの點に、イリュリスの果した偉大な歴史的意義が存する。アウレリアーヌス(一人のイリュリス)に於けるこの太陽宗教の導入の動機は、外敵に對してローマ文化(Imperium)

(Imperium)を守ろうとする點にあつた。換言すれば、太陽宗教によつて偉大なるローマの過去を復興し、帝國を再建せんとする點にあつた。つまり太陽宗教の受容は、唯一神太陽の光によつて被われた *Optimane* と人類の統一を意味する。しかもそれは、單なるローマ文化の偉大な現實の再現ではなかつた。そのようなことは不可能であつたのである。ローマ人の支配するローマ帝國は既にすぎ去つていた。むしろ新しいローマ思想の創造を意味した。かくてアウレリアーヌスの一人格の中に、イリュリス的なものとローマ的なものとはオリエント的なものを媒介として結合した。その際、古代ローマの創造力であつたローマ人の深い宗教意識は、このアウレリアーヌスにとつても同じく根本精神であつた。新しいローマの神、太陽は、オリエントの起源を喪失せずして、しかもなおローマの國教にまで高められ、ローマ精神がこの受容をば自己の輝かしい未來形成的原動力たらしめたのであつた。この事實の重大さはそれに盡きぬ。アルトハイムはこの歴史的事件を、更に後の文化の擔い手として、イリュリスに代つて登場し來るゲルマン諸族に歴史

的關聯をつけていることも驚嘆に値する。それは、ゲルマン諸族の楯の印章に *Sonnensymbolik* が存することを論證して、アウレリアーヌスはケルト民族、イリュリア民族ばかりでなく、後に登場するゲルマン民族にも、彼らに適應した一つの神を與え、そのことによつて彼らゲルマーンをして、ローマ帝國の防衛と建設とに重大な役割を果すことを可能にさせた、ということである。かくして《偉大なイリュリア出身の一人格の中に、ローマ的なものとゲルマン的なものが互に手を把り始めた》のである。オリエント的なものとローマ的なものと内的綜合を意味したアウレリアーヌスの事業が、更にゲルマン的なものへの密接な結合の契機をも含んだとすれば、續くディオクレティアーヌス、コンスタンティウスによるローマ帝國の再建、更に「キリスト教帝國」への轉換は殆んどいまひと押しのところまで準備されるに至つていふやうな過言ではない。その際、新しい世界帝國の創造が、世界精神を代表する宗教（キリスト教）によつてその精神的意義を附與されたことは周知のところである。

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

吾々は最後に、アルトハイムの本書に於ける歴史觀に及びたいと思うが、そのうち特に彼の「世界史」觀の問題と「古代末期」の問題とを取上げ、二、三の興味ある事實を提示するに止めたいと思う。

第一、アルトハイムの『古代世界の衰退』は、單なるローマ帝國の、あるいは所謂「地中海古代世界」のそれではなくて、ユーラシア大陸全體に及ぶ大規模な眞に世界史的關心に動機づけられた没落論である、という點は、時代の年齡的に一世代古い他の三人（ロストフツェフ、コルネマン、ウエーバー）に比して特に顯著な事實であり、ここに特に、第二次世界大戰が歴史觀に及ぼした強い衝擊を讀み取ることは必ずしも誤りではあるまい。ウエーバーの『古代農業事情』（一九〇八年）が取扱つた領域、ロストフツェフが『ローマ帝國の社會經濟史』（一九二六年）並びにそれに加えて『ヘレニズム世界の社會經濟史』三卷（一九四一年）に於て取扱つた領域、コルネマンが『地中海領域の世界史』二卷（一九四六年）で取扱つた領域、これらの三つはほぼ同一の地域的空間に於

て古代史を考察している。つまり大體同一の地理的空間に於て「古代世界」なるものを考えているのである。しかもそれは古典ギリシヤの歴史家や地理學者が傳統的につくりあげた古代世界像と大體一致しているということが出来る。即ちイオニアに於て最初の地圖を作成したミレートスのアナクシマンドロス（紀元前五五〇年頃）を踏臺とし、之れに種々の（地理學的・人種學的）補足訂正を加えて作成した同じくミレートス人、ヘカタイオスの地圖、⁽⁴⁾ほぼこれに立脚している史家ヘーロドトス（四八四—四二五）の古代世界像⁽⁵⁾、更に降ってアレクサンドロス大帝の征服行並びに Pythea von Massalia の旅行によるヘレニズム時代の一段と擴大された見聞に基き、そして最初の學問的測量の基礎によるキュレネ人エラトステネス（二七五—一九四年）の地圖⁽⁶⁾、などである。これらの地理學にあらわれた相互の相違點やその他興味ある諸問題にはここで一切立入らぬとして、吾々の問題ある諸問題にはここで注意を喚起すべき點は、古くはエドゥアルト・マイヤーを始め、ウエーバー⁽⁷⁾、ロストフツェフ、コルネマン、いずれもその古代世界像の地理學的輪廓は、

右の古典ギリシヤ及びヘレニズム時代の古代像と合致しており、乃至はそれを暗黙裡に當然のこととして前提しているのに、之れに對してアルトハイムの古代世界像は、正にプロレマイオス⁽⁸⁾（紀元後一五〇年頃）の地理學が與える世界像にほぼ照應するということである。個々の詳細な點に於てプロレマイオスの地理學が如何に從來のそれに飛躍的に正確さを加えたか、又、如何なる誤謬を含むか、というような點は別として、ここで重要なのはその兩者の全體像の基本的差異である。既に地圖を比較してみても一見して明瞭であるように、從來のギリシヤ・ヘレニズム時代の世界像は、アナクシマンドロス、ヘカタイオス、ヘーロドトス、エラステネスと漸次擴大されて行つたとはいへ、所詮、古代オリエントの東方世界をアジアとしてギリシヤ・ローマの西方世界をヨーロッパとして、この二つのほぼ均等の大きさの對立を基軸とする構造の世界像である。之れに對してプロレマイオスのそれは、東は漢帝國の首都をも含むユーラシア大陸大に擴大され、南はアフリカ大陸の心臟部 (Agisymba)、更にエテイオピアにまで達する、驚くべき廣大な地理的空

間であつて、ヨーロッパはその一つの狭小部分に位置づけられていたのである。事實アルトハイムは、この大著の第二巻の本論を形造る最初の章に於て、プトレマイオスの地理學を手引に敘述を始めているのは誠に當を得た手藝と申す外はない。そしてこの差異は、アルトハイムに於ける世界史像が、二つの大戦の體驗、殊に原子力時代の登場によつて決定的に從來の古代世界像から脱却することを餘儀なくされたことを意味する。ロストフツエフによつて古代世界觀は、地中海世界の外部と遮斷された古典古代都市文化の内的觀照に終始するものであり、ウエーバーやコルネマンに於ては、古代世界は後の西ヨーロッパとの對比又は形成への關聯の意識が強力に作用しているのに對して、アルトハイムに於ては、全く異つた問題が考えられているのである。次にその點に觸れよう。

第二、アルトハイムに於ける「世界史」概念に含蓄されている基本動機乃至基本思想の一つは、「歴史的運命の共通性」の認識であると思う。アルトハイムに於ては、一つの民族、一つの文化圏の孤立性、獨立性を推進

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

乃至主張する意圖は全然ない。之れに代つて諸々の民族群、國家群、文化群が相互に交流し激突するところの世界的空間、言わば大陸的空間が前提せられている。これこそ第二次世界大戦の歸結であつた。アルトハイムは、この大戦によつて、國民國家の理念は危機に追い込まれ、一層包括的な一つの大國家形成へと向う方向が示された結果、從來のように諸々の民族や國家や文化を國民的特殊性に於て個別的に觀察するという方法は今日ではもはや妥當しないという。それ故現代歴史學の歴史的思想といふものは、世界史、普遍史としてのみ可能である。ユーラシア大陸大の規模に於て展開された遊牧民主義とシャーマニズムを知る者のみが地中海地域の都市文化の正しい位置づけが出来るのだ、というのである。だからして、ロストフツエフが帝政社會經濟史の研究で行つた、事實影響するところ甚大であつた基本的構想、「都市對農民の對立」というシェーマは、アルトハイムの場合、ユーラシア大陸全體に互る一種社會學的な構想に置きかえられてしまつてゐる。すなわち、「砂漠對沃地」、「ステッペ對舊文化地帯」、「ステッペの遊牧民對都

市及び定住農民」などの對立の構想である。ところで、これらの對立によって如何にして世界史が成立するのであるか。吾々はここで又もや、アルトハイムの「世界史」概念を構成する言わば方法的兩脚として、「對外關係の優位」と「民族性」の二概念について一層深く掘り下げてゆかねばならなくなるが、先ず差當りこの關聯では次の重要な一事を指摘して置かねばなるまい。それは「歴史的運命の共通性」を創り出すのは、「商業」ではないし、又世界宗教でもない。むしろ「一定の歴史の様式」は「血と涙、苛酷と鬭争」から生じたのであって、「救済や來世の希望、利益や損失」の世界はこれらの領域とは異なるものである。かの「シルク・ロード」によって表示せられる遠隔地の結合なるもの、即ち流通世界の共通性は一つの共通の運命を形成することが出来なかつた。要するにアルトハイムは、舊文化を代表する三つの文化圏、即ち支那、イラン、ローマを結んだ——インドが除外されている點注意⁽¹⁰⁾——シルク・ロードの役割も、それは相應の意義はみとめられるにしても、たかだか皮相な役割しか果さず、世界史的な文化様式の轉換には全

全無力であつたとみる。むしろ決定的なのは軍事的契機であつた。ところで、アルトハイムに於ては、一方で軍事的變革という點に於て世界史的運命の共通性を強引に推進した作用契機をみると共に、他方に於て形成された新しい世界としての中世世界の共通性の原理をやはり軍事的契機（騎兵制）に於てみていることも看過され得ぬ點であろう。アルトハイムの言うところの、中世世界をして一つの共通性をもつた世界たらしめた「一個の歴史の様式」(ein geschichtlicher Stil)なるものは、上下二卷のいたるところで述べられているが、その特徴的メルクマールは、馬・馬術・騎兵・決戦主力として騎兵隊・騎士階級と貴族・騎馬試合と一騎打・英雄主義とヘルデンリードなど一連の要素を意味している。而もアルトハイムは、古代の衰退を正にこの様式の轉換の中にみていることは明かである。勿論アルトハイムはこの歴史の様式の浸透度について各地域が皆同一ではあり得ないことを認めてはいる。しかしその相違よりは、先ずもつて世界史的共通性が當面の問題なのである。この點はウェーバーの問題意識と對比すると非常に明確となる。ウエー

バーの場合には、「歴史的運命の個體性」が問われる。一口に地中海古代世界と言っても、ウエーバーが『古代農業事情』で明かにしたように、エジプトやバビロンの叙述に於ては、ギリシアやローマの經濟發展と異ならざるを得ない種々の自然的要因に制約された歴史的・社會的諸條件を特徴的な仕方でも認識した。又、ウエーバーは既に本書の劈頭に於ては、東アジア諸民族とヨーロッパの西洋とが、古い遊牧民様式から定住農耕様式に移行する際の『Siedlung』の特徴的な差によって、如何にその後封建社會への移行が質的に相違せざるを得なかつたか、が暗示せられてるのである。又彼の『世界諸宗教の經濟倫理』なる比較宗教社會學的研究についてみれば、それは確かに『universalgeschichtlich』な構成を具えてはいるけれど、しかしそれは、特定の方法概念の構成に基づく普遍史、すなわち、方法的緊張によって一つの意味關聯に齎された普遍史であつて、現實に相互に交渉と鬭争とをもつてつながらる世界史ではない。そればかりか、そこにはそれぞれの文化圏の種々の要因就中宗教的に刻印づけられた特性、歴史的運命の個體性を印象づ

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

けられる。例えばインドのカースト社會が、種々の自然的・社會的要因（ウエーバーは單に之れを、幾つかの外部的要因と言っている）に規定せられつつも、それらと複雑に絡み合いながら、しかもなおやはり就中バラモン祭司の果たした絶大な意義を強調しつつ、『バラモンの、あらゆるものに浸透して支配した、絶對的な影響がなかつたならば、世界に全く比類ないこの社會制度は成立しなかつたであらう』とウエーバーの言うのを聽く時、インド社會を恰かも運命的必然性に於て規定づけていった個體的要因の重い響きを感じざるを得ないのである。ウエーバーにあつては、「封建社會」なるものも、實はヨーロッパ的封建制が世界史上唯一獨得の性格のもの、しかも典型的なる發展の諸條件を具えたもの、と考えられているのである。それ故、吾々としては、アルトハイムの言う軍事的契機、騎兵制の成立なるものも、それが一個の永續的社會發展のよく耕やされた土壌の上に花咲くものでなければ、結局は古代世界没落の大波の中にその歴史的役割を失つて行つたという他の諸事情を考え、その意味でこの體制を完成させることが出來たのは、必ず

しも兵制改革をいち早く受容した東ゲルマン諸族ではなくて、西ゲルマン諸族の特定部族と地域に於てであった事情の歴史の意味を問わねばならなくなるのである。⁽¹¹⁾しかしながら、「歴史的運命の多様性(≡個體性)」はもとより「歴史的運命の共通性」を前提している。そしてアルトハイムに於ては、この「共通性」が先ず問題なのである。しかもそこに考えられている「世界史」の意味は、更に一段と深い思想的背景と關聯しているのである。

第三。アルトハイムに於ける「世界史」概念の根柢をなすいま一つの基本契機は歴史主義(Historismus)であるとなすことが出来る。勿論——ウェーバーに於てもそうであるように——アルトハイムに於てもこの概念は「どこにも顔を出してはいない」。しかし彼が『Primat der Außenpolitik』並びに『Volkstum』なる二方法概念を使って彼の「世界史」を考察する本来の動機が、このヒストリスムスの精神に存することを理解する必要がある。それは彼が、この世界史に於て始めて「民族個性」(Volksindividualität)の創造が問題となりうるという點を強く主張しているところからして明かにせられるの

である。さて、アルトハイムの究極的關心は「新しい民族個性の出現」という點に向けられている。しかしながら、この新しい民族個性が花を開き實を結ぶに至るためには、對外的關係に於ける諸民族の交流激突する闘争と抵抗の場(≡世界史)を必要とする。彼は民族的乃至國家的個性の創造を、《内的自己法則による封鎖的な統一體として》専ら内部發生的に考察する立場を、ロストフツエフを豫想しつつ、個人主義的、エゴイスト的倫理乃至世界觀の立場として排斥する。《假借することなき決の中にこそ、一民族、一國家のキャラクターは刻印されるものだ》。吾々は更に一層明瞭に次の様な言葉に接する。《國家や民族は決して如何なる時代にも單獨には存在しない。……競走や對立の中からそれは目覺め、空間の中で突進し、衝突し、戦い、又契約を結ぶ。この外的對決が内部に影響を深く及ぼして、個々の共同態的組織の枠内で諸々の反作用が呼び覺されるのである。しかもこの仕方と程度こそは、何よりも先ず、外部現象によって規定せられつつ現れ来るものであることを注意せねばならぬ。……この反應から個體性は呼び起されるので

ある。吾々はここに於て何らの疑もなく、アルトハイムの「對外關係の優位」なる概念が、單なる戰爭や政治的干渉の外的事象を意味するだけのものではなく、「民族性」概念と表裏をなしつつ、深く歴史主義的な、個體創造への關心に究極化せられてゆく精神に根を卸した表現であることを知るのである。吾々は既に、アルトハイムに於ける『Volkstum』の概念に特別の注意を喚起しつつ分析を行った。その際ローマ史の内部では、この民族性の覺醒は、従来の軍事的政治的體制の崩壊過程の中に、新しい防衛體制の創造と新しい精神的創造との二つの面に於て、しかもこれが、より若い民族性の媒介によって、具體的にはイリュリア民族によって、行われたことを指摘した。Römertum は Illyrier の活動によって新しく息を吹きかえた。それは單なる古ローマ傳統の維持者としてではなく、決定的に重要な新創造を意味した。ローマ思想の創造がそれである。『ローマ思想は特定の Volkstum と結合することによって、偉大な精神的形成體の一つとなり始めた』。現實のローマは衰退し去っても、一個の精神的形成體となったローマ文化は、

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

今や『一種永久的なもの』となったのである。それはもはや古代的なものに盡きることなく、むしろ西ヨーロッパの性格を擔いつつ新しい未來創造に連る輝かしい理念となった。——更に注意すべき點は、このイリュリスなものが、ローマ帝國内部の諸民族共同態であつて、ゲルマーネン、スラーヴェン、アラバーなどの帝國外部の民族とは、ローマ帝國とその文化とに對する關係が異なるということである。このことを對外關係が巻き起す世界史的觀點からみるならば、前者即ちローマ帝國内屬州諸民族、例えばイリュリスの如き、舊いローマ民族よりは比較若い民族の立場にとつて、その民族性の問題は、古い世界文明を媒介としてのルネッサンス的新創造とこの「存續」(Fortleben)の問題である。之れに對して後者、即ち古代文明との直接的結合はなく、むしろ斷絶ある「全然若い民族」(ゲルマーネンなど)にとつてその民族性の問題は、舊文化の「繼承」(Übernahme)に於ける精神的「決斷」(Entscheid)の問題である。そこでアルトハイムの古化衰退論の全貌は明かとなる。すなわちかつて地中海領域を征服し、ヘレニズム文化の相續者の

地位についた共和制都市國家ローマは、紀元後第三世紀の内亂を通じて、歴史のトレーガーたるの地位を帝國内屬州のより若い民族と交替したが、ユルネマンの立派な表現に従えばこの「新しいローマ」の再建は、やがて一、二世紀の後には、こんどはゲルマニオンに交替するわけである。

第四。そこで吾々は最後に「古代末期」Spätantikeの問題に關説して置きたい。⁽¹²⁾既にのべたように三世紀の過程に、古代の終焉と中世の開始をみるこの見解は、その嚴密な時代點の決定はともあれ、ウェーバー、ロストフツェフの社會經濟史の見解ともほぼ一致しているし、又 Cambridge Ancient History の全體が取扱っている立場でもある。⁽¹³⁾ただここで經濟史的諸要因を背後に押しやり、時代轉換の衝擊を軍事的契機にみていることは、吾々が明白にした通りである。ところでこの轉換は、急激な變轉でありながら同時にアルトハイムの場合、幅広い過渡期としての「古代末期」の問題をも形造っていると考えられる。その點を一應明確にするために理論的に要約して言えば、こうである。歴史發展に於ける文化

の Träger の交替を特に Volkstum に於て考え、そしてこの民族性が新舊文化交替過程に參與してくる役割と性格とに着目して、換言すれば舊世界文化乃至その擔い手たる民族に對してより新しい及び全く新しい諸民族がいかなる對決の仕方を示すかの相違に着目して、これを Fortleben und Uebernahme (Entscheid) の差違、

又は Renaissance und Humanismus の對立として把握する。従つて具體的に言えば、アルトハイムの「古代末期」は、三、四世紀と五乃至七世紀頃との二つに一應區分せられうるものであつて、前者に於てはローマ帝國屬州内諸民族が、後者に於ては Germanen, Araber, Slaven, が考えられていると言ふことが出来る。

そこで一つの矛盾とも言ひうるであろうような問題が提起されてくる。アルトハイムは、一方では轉換(衰退)の生起と中世の開始を明瞭に主張しながら、他方では上述したような古代末期史の問題を從來の如く必ずしも中世史の領域に委ね切つてはいないからである。このことをどう理解したらよいであろうか。吾々はいま十分に詳論する暇がないが、差當り次のような性質のものとは解

せられ得ないかと思うのである。たしかにアルト・ハイムに於ては、軍事的變革という點で全文明に及ぼす決定的時代轉換の衝撃を強くみるその問題意識の中に現代史の認識が反映されている。しかしながら、古代史研究の側からする問題意識としては、單なる古代文化衰退(没落)原因論だけに共感しそこに意義を見出す立場にはもはや單純に留まり得なくなつて來てゐるのではあるまいか。むしろ衰退と創造とを共に包含する過渡期の文化現象を自體に對して積極的關心を向けるに至つてゐるのではないか。前大戰後、ことに凡そ一九三〇年前後の頃から、漸次西歐學界、就中ドイツ學界に於て自覺せられ、近時ことに Straub, Stroheker, Ensslin, Hartke, Alföldi などを中心に、盛り上つて來たあの『Spätantike』と云う問題意識が、正しくこの、アルト・ハイムの言わばすつきりしない二重性格に何か根本的に關係してゐる事態であるとすれば、吾々は次のように理解することも出來よう。前大戰前後で問題となつた古代文化没落論(「斷絶」であれ「連續」であれ)は、今や「古代末期」という問題形式に移りつつあるのではなからうか。『Katastrophe-

フランツ・アルト・ハイム著『古代世界の衰退』について

ntheorien」への反撃や『Kontinuitätsprobleme』として吾々が既に指摘したように(13)、Ch. Dawson, H. Prentice, A. Dopsch などによつて第一次大戰後取扱われた問題の性格は、ある程度まで M. Weber に於ても共通のものがみられうる。というのは、ウェーバーの場合、單に西洋近代資本主義との對比に於ける古代經濟生活の特質、兩者の「類型的」差異の點ばかりでなく、吾々が特に鋭く注意を喚起したように、むしろ西洋古代から全西ヨーロッパ經濟發展の上昇してゆく線上に於て、經濟發展の「連續性」こそが内部に深く認識せられていたものと、吾々は解したからである(17)。そして正にこの點に限つて、Dopsch と Weber の(アルト・ハイムに比較すれば)共通性が浮び上つてくるのである。つまり第一次大戰前後の狀況に連るこれらの人々の文化連續性を第二次大戰前後の、上述した古代史家側からする同一問題への接近の仕方と比較したならば、少くとも次の點だけは明瞭となつてくるであろう。即ち前者に於ては中世乃至近代を含む西ヨーロッパが古代とつながりをもつかどうか、いかなるつながりを持つか、という視角であり、古代末期

が問題となってもそれは、古代の末期とみるか中世の初期とみるかであつて、新舊民族の交替接衝する、言わば未知の創造可能性一般とも言ふべきものを含んだ、過渡期それ自體としての古代末期という構想を、古代、中世から獨立して前面に押し出す、というような積極的契機は、應見當らないと言つてよい。之れに對して、後者では、正にこのことが強く自覺せられてきて居るのではあるまいか。従つて問題提起の仕方、Katastrophenか Kontinuitätか (Entweder-oder) というような形式としてでなしに、むしろ滅亡の意義を十全に受けとめながら同時に創造へきりかえてゆく問題、少しく逆説的に表現すれば、滅亡と創造との間のつながり、に關心がよせられて來て居るのではなからうか。こうした問題のとりえ方は、Kornemann の 《Weltgeschichte des Mittelmeerraumes》 に於ても 《Spätantike》 の特別な章區分の下に、十分に自覺的に取上げられており、獨自の構想の下にその體系的位位置づけがなされて居るのである。⁽¹⁸⁾

このように考へてくると、ウェーバーやロストフツェフがローマ帝國の政治的崩壞の問題を經濟的要因から發生

史的に取扱つたすぐれて經濟史的諸事情を、單に疎外するだけに終つて居るアルトハイムの仕方に大きな疑問を感ずるのであるが、しかし少くとも、古代末期史の問題追求の立場からみると、吾々がその内面的關聯や性格にまで立入つて検討を加へつつ明かにして來たアルトハイムの方法的諸概念、即ち《Primat der Außenpolitik》、《Volkstum》は、單に軍事的・精神的方面に役立つ方法概念であるばかりでなく、同時に一層廣い幅での社會經濟史的問題側面をも含みつつ、頗る有力な暗示を與へるのでなからうか。

さてかくのごとく、古代末期史としての含みをもつたアルトハイムの古代世界衰退論は、世界史に於ける戦争や危機や鬭争や破壊に對する極めて能動的な反應を旺盛に示したと言ふことが出来る。現代危機の歴史學たることを自ら標榜する彼の『古代世界の衰退』、従つて彼のローマ帝國没落論は、かのロストフツェフにみられたような迫り來る災害への不安感・抵抗し難い文明の野蠻化・強制國家化の重壓感、ではなくして、危機と戦争に對決する、破壊を創造へと轉換せしめる民族文化創造論であ

り、これをもって、不安なる現代、抑々悲劇的なる歴史の現實への抵抗あるいはその超克を意圖するものと解せられるのではあるまいか。確かにロストフツエフの二大著作の結びは、等しくこの歴史の悲劇性への一種拂拭し難い深く暗いメランコリーの告白に終っている。例えば『ローマ帝國社會經濟史』の結びに於て、國家の權力者が若しも國民大衆を無視するならば、必ずや大衆の革命的反抗は起らざるを得ず、いかに繁榮せる文明と雖も滅亡はやがて必定である、という教訓を示した後に、しかし結局、文明は大衆化することによって、その質的低下は避け難いのではないか、という深刻な疑問を提出するに終っている。⁽¹⁹⁾ ロシア革命によって亡命の悲運を選び、自ら他國の客となって、祖國なき一國際市民となつた偉大な古典古代史家ロストフツエフが、國家や民族の運命に對して何ら積極的パトスも持ち合はず、ロシアに於ける下層農民による市民社會の野蠻化というテーマを古代世界に投射せしめて、輝かしい成果を生んだと共に、ある程度、「誇張」と不當な史實の歪曲を歸結するところが避け難かつたのに對して、二つの世界大戦によって

フランツ・アルトハイム著『古代世界の衰退』について

祖國ドイツの偉大な民族と國家との壊滅を身をもって経験しつつ、現にベルリン大學の古代史家として史學研究にたづさわっているアルトハイムが、崩壊を越えて新しい民族個性の創造の將來に眞剣なる期待と信仰を懐くのは、いずれも理解せられうる事柄ではなからうか。ともあれここに吾々は、現代危機に直面して、旺盛なる精神的對決をもって臨んだ歴史主義の一發現をみることが出来るのである。

註

- (1) アルトハイムが戦後公刊した著作は、あるものは舊版の改訂増補版ではあるが、既に最も多作な方に属している。Weltgeschichte Asiens im griechischen Zeitalter. 2-Bde. 1948. (dazu: Gnomon 1950. HZ. 172). Alexander und Asien. Geschichte eines geistigen Erbes. 1953. Niedergang der alten Welt. 2 Bde. 1952 (dazu: Gnomon 1954). Römische Geschichte. Band I, II, 1952 ff. Römische Religionsgeschichte. Band I, II, 1953 (dazu: Gnomon 1954). Aus Spätantike und Christentum. 1952 (dazu: Gnomon 1953). Literatur und Gesellschaft im ausgehenden Altertum. 2 Bde. 1948 (dazu: Gnomon 1950). Atila und Hunnen. 1951

(dazu: Gnomon 1952) Geschichte der lateinischen Sprache, 1951.

- (2) Niedergang der alten Welt. 2 Bde. Band I. 350 S. Band II. 537 S. 本書は本文の「古代史」の「Die Soldatenkaiser 1939, Krise der alten Welt I, III, 1943」の改訂増補されたものである。この書は全被の「ては、村川堅太郎『古典古代史學界の近況』西洋古典學研究 I (一九五三年) 一〇四—一〇六頁をみられた。増田四郎『騎兵制と封建制起源の問題』社會經濟史學一九五三年二二七—二六六頁参照。特に二五五頁以下は第一卷の九二—一二四頁「Goten」の關する紹介がある。
- (3) 以下の考察はこれらの諸點を明確にする目的の下に、主として量質共に充實した第二卷「ローマ帝國」の部分に重心を置き、第一卷を顧みながら行うこととする。枚數を過度に越えたため引用頁は全部省略した。
- (4) Hekatasos のことは RE. VII (1912) 2667 ff. F. Jacoby の論文参照。
- (5) Herodotus: IV, 36, V, 49 など簡所参照。
- (6) Erasthenes のことは Hugo Berger: Geschichte des Wissenschaftlichen Erdkunde der Griechen. 2 Aufl. Leipzig 1903. S. 406 ff.
- (7) Max Weber: Agrarverhältnisse im Altertum in その領域が「ローマ」の世界と同一であるとの示唆は、上原専祿教授「一橋大學講義(一九四九年)」によって與え

られた。なお「經濟學研究の榮」(一橋大學新聞部編) 西洋經濟史篇(一九五〇年)中の同教授解説「西洋古典經濟史」は「マンロー」の本書の地域的構造を論じている。

- (8) Ptolemaios のことは J. O. Thomson: History of ancient geography (1948) p. 230 ff. P. Schnabel-A. Hermann: Text und Karte des Ptolemaios (1938) の外に、古くはやはり依然として Fr. Gisinger: RE. Suppl. Band IV (1924) 650 ff. W. Kubitschek: RE. X. (1919) 2061 ff. などの研究がある。
- (9) Altheim: Niedergang. II. K. 2. Orbis Romanus. (1919) 2061 ff. などの研究がある。
- (10) 但「マンロー」文化と「マンロー」の世界的文化交流の問題は「Altheim: Weltgeschichte Asiens im griechischen Zeitalter 1948. 2 Bde.」に於て取扱われる。因々本書は W. W. Tarn: The Greeks in Bactria and India, 1938. に刺戟されて書かれたものである。
- (11) この點では「騎馬制の必要を満たす經濟的背景としての土地制度が當然問題となる」のであり「騎馬制」とか「騎馬勤役」という制度は、それ自體では封建制度を形成する決定的な手とはいえない。それが決定的なメルクマールの如く作用するためには「どうしても、それに適應し、それを裏ける獨得の土地制度並びに政治情勢と結合しなければならぬ」(増田四郎「上掲書二六五頁」という批判的指摘のもの) 眞理性に十分耳を傾けなければならぬと思う。
- (12) アルトハイムが直接「古代末期」を取扱ったものも「

三出ているが Altheim: Spätantike als Problem, in Soziologie und Leben, herg. v. Carl Brinkmann 1952. S. 166—194 は残念ながら入手出来なかった。従って以下の私の把握は、この上下二巻の大著中に散在する多くの箇所¹³の総合的考察から得られたものである。

- (13) 特に CAH. XII, C. VII Oertel の論文を参照。
 (14) 一九三〇年前後に「古代末期」を取扱ったものうち R. Laqueur, H. Koch, W. Weber: Probleme der Spätantike. Stuttgart 1930. M. Gelzer: Altertumswissenschaft und Spätantike, HZ 137 (1927). J. Straub: Vom Herrscherideal in der Spätantike. Stuttgart 1939. H. Koch: Probleme der Spätantike: Die Kunst 1930, 39. H. P. L'Orange: Studien zur Geschichte des spätantiken Porträts. Oslo 1933. dazu R. Herbig: Spätantike Bildniskunst in N. Jbb. XIII, 1937.
 (15) 若干の例を挙げて置く。W. Ensslin: Gottkeiser und Kaiser von Gottes Gnaden. Sitz. B. Bayer. AK. 1943. Heft 6. Derselbe: Theoderich d. Gr. München 1947. J. Straub: Studien zur Historia Augusta. 1952. K. F. Stroheker: Das konstantinische Jahrhundert im Lichte der Neuerscheinungen 1940—1950. Saeculum Bd 3. 1952. Derselbe: Um die Grenze zwischen Antike und abenländischen Mittelalter. Saeculum 1950. Derselbe: Der senatorische Adel im spätantiken Ga-

lien. 1948 J. Vogt: Constantin der Große und seine Jahrhundert. 1949. Alföldi: A Conflict of Idears in the Late Roman Empire. 1952. Derselbe: The Conversion of Constantine and the Pagan Rome. 1948. Hartke: „Kinderkeiser“. 1951. H. Aubin: Vom Altertum zum Mittelalter 1949. Derselbe: Die Frage nach der Scheide zwischen Altertum und Mittelalter. HZ 1951. E. Kornemann: Weltgeschichte des Mittelmeerraumes. 1948. Band II, K. III Die Spätantike.

- (16) Ch. Dawson: The Making of Europe 1933 H. Pirrenne: Muhomet et Charlemagne 1937 A. Dopsch: Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung. 2 Bde. 2. Aufl. 1923—1924. なお拙論、『古代文化没落論をめぐる社会経済史的問題の「性格」』四二頁以下参照。
 (17) 上掲書、五五頁以下参照。
 (18) 拙論ホルネマンの「地中海世界史とヨーロッパ生成の問題」参照。但し、この拙論で十分論じたように、ホルネマンの場合、»Neurom und Neuperser«という独自の構想の下に、新舊文明の交錯する古代末期の総合的把握が特に注意深く考察されているが、「ヨーロッパ・イデア」の形成という主要モチーフによって、ヨーロッパ成立史への傾斜に貫かれつつ、その意味での、一種の「連続性」の立場を取っているものと解される。

(6) Rostovtzeff: *Social and Economic History of Roman Empire*. 1926. p. 486. 更に *Hellenistic World*. 1941. p. 1311. に於て、ヘレニズム文明は、もっと大なる創造力に富んでいたが、結局ローマの侵入によって壊滅した。しかし、これは既に「内に」對立と闘争があつたために、「外部的」ローマの侵襲を可能にしたものであつて、ローマの働きは、既に行われていた「分解と破壊」の作用を「促進」させたにすぎぬ、となし、『帝政ローマ社會經濟史』と同一のテーマを、この大著の終りに繰返えした後、次のように結んでいるのである。『一つの、しかも同一の、偉大な國民のなかに、破壊的及び創造的の兩つの力の二律背反が存するということは、人類の歴史に於けるいま一つのメランコリーなる例である』——いづれにせよロストフツェフにとって、ローマ帝國の又ヘレニズム世界の社會經濟史研究が、いかなる深い思想感情の表現であるかを、人は知るべきである。彼の類い少い偉大さは、「考古學」と文獻史料研究とを、學者をして屢々絶望せしめる程の渾然たる綜合に齎した力量の點ばかりではなかつたのである。

(20) の問題については A. H. M. Jones: *Michael Ivanovich Rostovtzeff 1870—1952*. (*The Proceedings of the British Academy*, vol. XXXVIII. p. 347—361) を参照。この中で Jones は、ロストフツェフがロシア革命の事實をあまりに古代世界に持ち込んだ結果、史料が證明する以上の解釋を押しつけたことを非難し、例えば、ロストフツェフが言うような「農民と軍隊」の *class solidarity* などは事實なかつたこと、軍隊は職業軍人からなつてゐて、彼らが破壊したのは「都市ブルジョアジー」であるよりはむしろ農民である、などロストフツェフと反對の主張をなしている。要するに彼によれば、ロストフツェフは、帝政時代のブルジョアジー（中産階級）の經濟生活、ことに貿易及び工業の經濟的意義などの諸點を誇張しすぎた、としている (*ibid.*, p. 359, 360) ——しかし彼はロストフツェフを一九世紀の Mommsen, Otto Seeck などに匹敵する地位を要求すべき大歴史家となしている。(P. 361)。